

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

武田祐吉の『日本書紀』研究： 新出資料と著作を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター 公開日: 2023-02-09 キーワード: 武田祐吉, 『日本書紀』, 国学, 本居宣長 作成者: 渡邊, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001989

武田祐吉の『日本書紀』研究

―新出資料と著作を通して―

渡邊 卓

要旨

國學院大學教授を務めた武田祐吉は、上代文学、特に『万葉集』研究で有名である。しかし、武田は國學院在学中には上代文学の研究は行っておらず、また、本格的に『万葉集』研究に携わる以前には、六国史の国訳（訓読）に興味を持っていたのであった。そこで本稿では、武田祐吉の『日本書紀』研究に焦点を当て、その研究態度について論じた。考察の対象や根拠には、武田の著作の他、現在、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」において、調査・整理が進められている武田祐吉の新出資料を用いた。

武田が関与した『日本書紀』に関するテキスト類は、『上代文学集（校註日本文学類從）』、『国文六国史 日本書紀』上下、『日本書紀（日本古典全書）』の三本である。これらは近代の『日本書紀』研究に於いても早期のものに位置付けられ、『日本古典全書』は『日本書紀』の注釈書としても注目される。また、これらのテキストの訓読文に着目すると、他のテキストとは異なり、文末表現に過去の助動詞「き」を補読するといった特徴が見られた。この時制を踏まえた訓読態度は、本居宣長の『古事記』の訓読と共通する点があり、宣長が『古事記』を「やまとことば」として捉え、武田は『日本書紀』を「純粹な国語」としてみていたところにも、同様の姿勢がみられた。武田は、漢文体の『日本書紀』を国文として捉え、先学を踏まえた研究を行っていたのである。

キーワード

武田祐吉、『日本書紀』、国学、本居宣長

一、はじめに

武田祐吉は國學院大學教授を務め、上代文学を中心とした研究を行ったことで知られる。特に『万葉集』研究に於いては著名であり、『万葉集』全巻にわたつての注釈書『万葉集全註釈』を著すなど論考も多く、昭和二十六年には、『万葉集』研究が評価され日本学士賞を受けたほどである。武田は明治四十一年に國學院大學へ入学し学問の道へ進むことになるが、『万葉集』研究を始めたきっかけは『校本万葉集』の校訂作業に従事したことにはじまり、^①國學院在学中より『万葉集』研究を志していたわけではないようである。また武田の著作や論文を眺めると、武田の学問は『万葉集』のみに限定されるものではなく、『古事記』や『日本書紀』の研究も行い、幅広く上代文学

を取り扱っていることがわかる。

これまで武田の学問については、その著作や論文から知ることしかできなかったが、平成十九年に國學院大學の校舎改築に伴う図書館移転の際に、武田に関する資料が発見された。これら資料には、自筆原稿・講義メモ・ノート・カード・書簡・影印などが含まれており、武田の学問を知る新たな手だてを有することとなった。これら新出資料からは、武田の学問の成立過程を窺うことができる。

そこで本稿では、まず武田の学問形成を辿り、新出資料を用いながらどのような過程で上代文学研究へ波及していくかを検証する。なかでも、韻文の『万葉集』に対し、散文の『日本書紀』を取り上げ、その研究態度をみていくことにする。

二、國學院大學の武田

武田祐吉と折口信夫は旧制中学校の天王寺中学校で同級であったことはよく知られている。武田は明治三十七年に中学校を卒業し、折口はその翌年に卒業しているが、折口が卒業後に國學院大學の予科へ進学したのに対し、武田は進学せずに上京している。武田の略歴²⁾を見ると、國學院入学以前には転居を度々し、就職もしていたことがわかる。その一端は『國學院雑誌』の彙報にもあらわれている³⁾。

同君自ら記すところに依れば「明治四十一年の夏愛知県の亀崎である肥料問屋の簿記方を勤めてみたのだが、将来の見込が無いと思つたので、かねての志望通り國學を以つて身を立てようとして國學院に入り」大正二年卒業して、翌年から三年間小田原中学に教鞭を執り五年以降東京帝大の嘱託を受けて、萬葉集校訂に従事、九年から本学に萬葉集を講じて居られる。

この記事は、武田が京都帝国大学から学位を授与されたことを報じる記事である。間接的資料ではあるが、これに拠れば、明治四十一年には愛知県の亀崎（現、愛知県半田市亀崎町）で肥料問屋の簿記方を勤めていたとある。しかし注目すべきは「かねての志望通り國學を以つて身を立てようとして」國學院に入学したと、自ら述懐していることであろう。この時の述懐によれば、武田は「國學」を志して、國學院に入学したとも考えられる。

國學院に入学した武田は学間に邁進した。その証に、武田は在学中に幾度か特待生となっている。特待生は、前年度の卒業式の際に数名発表されるもので、『國學院雑誌』には以下のように武田の名前が見られる⁴⁾。

大学部国文科予科 第二年生 武田祐吉（明治四十二年七月）
大学部国文科 第一年生 武田祐吉（明治四十三年七月）
大学部国文科 第二年生 武田祐吉（大正元年七月）

このように特待生となった武田は、卒業時には最優等学生となり総代を務めている。『國學院雑誌』彙報記事によつて武田の卒業式の該当部分を抜粋し掲げる⁵⁾。

「学事報国」新卒業生中学業操行共に優良なるもの大学部に一名師範部に二名あり其の最優等者大学部武田祐吉師範部平野壽作は皇典講究所総裁宮殿下より特に御商品拝受の榮を荷へり。

「答 辞」卒業生総代 武田祐吉

「卒業論文」和歌抄集家の研究 武田祐吉

武田は、卒業式において皇典講究所総裁の竹田宮恒久王殿下より記念品を拝受し、答辞を述べている。また、興味深いのは研究の出発点である卒業論文は「和歌抄集家の研究」であり、この時点では、上代文学に根ざした研究ではなかつたのである。武田が述懐した「國學」とは、國學院において「國文学」という形で、学問の基盤を形成していったのであろう。

最優等学生として國學院を卒業した武田は、就職活動の末に神奈川県立小田原中学校教諭となる。しかし大正五年、三十一歳の時に依願退職し、東京帝国大学の『万葉集』校訂の嘱託となるのであつた⁶⁾。この『万葉集』校訂の作業によつて、佐佐木信綱や橋本進吉などの研究者と出会い、本格的に『万葉集』研究に携わる契機となつたのである。ここで、ようやく上代文学研究という方向性が示されていくこととなる。また、この佐佐木との出会いは後に武田が、佐佐木の後任として國學院の『万葉集』の講義を担当することへも繋がっている。國學院の教員となつた武田祐吉は、大正九年に國學院大學講師、大正十五年に教授となつた。

そもそも、『万葉集』校訂の作業に加わるきっかけとなつたのは、國學院大學教授で恩師でもある三矢重松の働きによるものであろう。新出資料に含まれていた、三矢の武田宛の書簡⁷⁾には、その様子が窺われる。

貴翰拜見、御方針変更の事、八代氏よりも一寸承居候、御勇断御尤二存候、乍併小生ハ一体平凡主義の男故今しばらく（両三年）教員生活被成

候とも御損ハ有之間敷と存じ候、その精神にて先日も御話申候事にて只今とも意見ハ同様に候二付、御変更方針ニハ賛成も不致、又反対して御とめ可申確信も無之候、就いて承度ハ

一、御希望の仕事といふハたとへバ如何なる風のものか、

二、収入ハ如何程の御見当か、

三、御残業として御さき被成候時間ハ如何程、

四、東京にても教師ハ御きらひか、

五、史料編纂の方などハ如何、

六、六国史国訳の方ハ真ニ御希望か、

等ニ有之、右御報相待候て更ニ可申上候、草々頓首

九月十九日

重松

武田学兄侍史

ひさぎぞとうち喜びしかひもなく又きさ、けとおほせられつる

御病氣折角御大事可被成候

大正四年に書かれたこの書簡は、武田が小田原中学校教諭からの転職を希望していたときのものである。この後に、武田は『万葉集』校訂の嘱託になっており、三矢は武田の相談を受け、職業を紹介していたことが察せられる。この書簡の中で、三矢は武田に六つのことを尋ねているが、そのうちの六つ目の質問では、「六国史国訳の方ハ真ニ御希望か」と尋ねている。この質問から、このとき武田は六国史の国訳、つまりは訓読文の作成を考えていたということになる。これは武田が『万葉集』校訂作業に従事する以前に、六国史に対して興味があったということにもなる。武田は六国史の訓読文を、この書簡から十五年ほど経ってから、昭和七年に『国文六国史 日本書紀』として出版している。武田の著作には六国史関連のものは『日本書紀』しかなく、『万葉集』を中心とした上代文学研究で知られる武田であるが、武田にとって『日本書紀』研究は早い段階から意識の中にあつたと見て間違いないであろう。

三、『日本書紀』関連の著作

三矢の書簡から武田は早くから六国史に興味を示していたことがわかった。武田は本格的に研究を行うようになってからも『日本書紀』関連の著作や論文を発表している。後年になっては、國學院大學日本文化研究所で『日本書紀総索引』、『校本日本書紀』の編纂の立案、監修も行っている。武田の『日本書紀』関連の研究には、武田が校訂を行った『日本書紀』のテキスト類も含まれている。武田祐吉が校訂を行ったテキストは次の三本である。

・『上代文学集（校註日本文学類従）』 昭和五年十月 博文館

・『国文六国史 日本書紀』 上下 昭和七年十月 大岡山書店

・『日本書紀（日本古典全書）』 昭和二十五年一月 朝日新聞社

一つ目の『上代文学集』は、『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』『風土記』『佛足跡歌』『歌経標式』『琴歌譜』『祝詞』『続日本紀』『懷風藻』といった文献を書き下し、それぞれを抄録したものである。このうち『日本書紀』は、巻第一―第三までは全文を収録し、その他の巻は抄録である。それらの底本は、巻二に図書寮本を用い、それ以外は「通行本」が用いられている。ここでの「通行本」とは恐らく版本か活字本といった流布本の類であろう。この『上代文学集』は、他の武田の著作と比べても早期の著作にあたり、上代文献を網羅していたものとしても注目できる。

二つ目は先にも触れた『国文六国史』である。一つ目の『上代文学集』とは異なり、『日本書紀』全巻にわたっての訓読文が収録されている。この『国文六国史』は、國學院大學教授であつた今泉忠義との共著であるが、『日本書紀』は武田が担当している。このテキストの底本には、活字本である朝日新聞社刊の『六国史』が用いられている。朝日新聞社刊の『六国史』は、昭和三年に國學院大學教授であつた佐伯有義が、寛文九年版の版本を底本として校訂したものである。この『六国史』を訓読したことから、書名が『国文

六国史』となったと考えられよう。佐伯が校訂した本を利用して、武田が訓読文を作成した成立過程を見ると、『国文六国史』は國學院の学問の影響下で成立した本としてみることもできよう。

そして三つ目は、朝日新聞社の『日本古典全書』に収められている『日本書紀』である。これは昭和二十三年から刊行され、『日本書紀』全巻が六冊にわたって収録されている。先の二つは『日本書紀』の訓読文のみの収録であったが、『日本古典全書』は注釈本であり、『日本書紀』本文と注釈もあわせて掲載されている。この注釈本の底本は、巻一・二が彰考館本、巻十四は前田家本、その他は北野神社本が用いられており、いずれも『日本書紀』の古本系に属する写本である。古写本により本文を校訂する態度は、『万葉集』の校訂作業に従事していた、武田らしい姿勢ともいえる。また巻一・二・十四を除いた底本には、この当時では最善本と位置付けられていた北野神社本が用いられている点も評価できよう。北野神社本の欠本箇所は、彰考館本と前田家本によって補われている。この当時は複製本が盛んに出版された時期でもあり、ここで用いられている底本は、いずれも複製本が刊行されている⁶⁴。そのため文字の異同等を確認する際には、大いに役立ったと思われる。彰考館本の複製は、佐佐木信綱が代表を務める日本文献学会から出版されており、また貴重図書複製会が出版した北野神社本の複製は、國學院大學教授の宮地直一が解説を書いている。いずれも武田と関わりのある人物が関連しており、武田の周辺学問を考える上でも注目されよう。

『日本古典全書』の成立には、先述の新出資料から底本の他にも注目されることが明らかとなった。武田の新出資料には『日本古典全書』の草稿が含まれており、そこには、一紙に右側には訓読文として『国文六国史』が、左側には本文として佐伯有義の『六国史』が、貼り込まれているものが確認できた⁶⁵。『国文六国史』の方には、ペン書きで訓読文が訂正されており、『六国史』の貼り込み上部には北野神社本との校異が書き込まれている。このように、『日本古典全書』は先行するテキストを下敷きとして作成された所もある

とみて良いであろう。

『国文六国史』や『日本古典全書』は、先行する佐伯の『六国史』を下敷きにしてみるとみられるが、当時の『日本書紀』本文の出版物には他にどのようなものがあつたのか、出版状況を確認してみる。まず明治以降の『日本書紀』本文の出版物を並べると次のようになる。

国史大系（経済雑誌社校訂 経済雑誌社 明治三十年）

六国史（佐伯有義校訂 朝日新聞社 昭和三年）

新註皇学叢書（物集高見編 広文庫刊行会 昭和四年）

日本古典全集（正宗敦夫校訂 日本古典全集刊行会 昭和四年）

異説日本史 第十八卷（雄山閣編 雄山閣 昭和八年）

日本古典全書（武田祐吉編 朝日新聞社 昭和二十三年）

ここには、『日本古典全書』が刊行される以前のもので掲げた。明治に入り活字本の『日本書紀』が刊行されるようになるが、それらの体裁は漢文体の『日本書紀』本文に返り点や訓を施すといった、江戸期の版本を踏襲するものであつた。このように並べると、佐伯の『六国史』が下敷きであつたとしても、武田のテキストは他のテキストと比べても早い時期での刊行であることがわかる。特に武田の『日本古典全書』は注釈本としてみた場合、最も早い成立であり、その後の『日本書紀』テキストに先鞭をつけたと見ることもできよう。

次に、『日本書紀』の訓読文の出版も同様に見てみる。『日本書紀』の訓読文は、中世後期から近世にかけて登場した「仮名日本紀」にまで遡る。それまで『日本書紀』は本文に付された訓や返り点などをもととして訓まれてきたが、時代が下り『日本書紀』本文を仮名書きに改めた訓読文が作られたのである。近世期においては、国学者たち活躍もあり『日本書紀』の訓読作業が進められた。明治期に入ってから訓読文は、それら国学者の研究の延長上に位置付けることもできよう。「仮名日本紀」以降の『日本書紀』の訓読文を並べると、次のようになる。

新訳日本書紀（飯田弟治編 嵩山房 大正元年）

日本書紀神代卷（高根県皇典講究分所編 松陽新報社 大正四年）

註釈仮名の日本書紀（植松安編 大同館 大正九年）

日本書紀神代卷（世界聖典全集 改造社 昭和二年）

岩波文庫（黒板勝美編 岩波書店 昭和三年）

上代文学集（武田祐吉編 博文館 昭和四年）

日本古典全集（訓読）（正宗敦夫編 日本古典全集刊行会 昭和七年）

国文六国史（武田祐吉・今泉忠義編 大岡山書店 昭和七年）

このように他の訓読文と比べても、武田の訓読文は、『日本書紀』本文の出版と同様に早い段階での出版であることがわかる。『日本書紀』の訓読文も、他の『日本書紀』関連の文献がそうであるように、神代卷（卷一・二）のみに限定されることが多いが、武田は全巻に亘っての訓読を行っており他とは区別せねばなるまい。

四、武田の『日本書紀』訓読文

では具体的に武田の『日本書紀』テキストの特徴を、訓読文を通してみていくこととする。武田の訓読文の三本と、武田の訓読文の刊行と年代に近い、岩波文庫と日本古典全集を比較し検討を行うこととする。比較のため引用するのは、それぞれの『日本書紀』冒頭箇所である。

『上代文学集（校註日本文学類従）』昭和五年十月 博文館

古 天地いまだ割れず、陰陽分れざりし時、渾沌りたること鶏の子の如く、溟滓りて牙を含めりき。その清陽なるもの薄く靡きて天となり、重く濁れるもの淹滞りて地と為りき。精妙なるが合ひ搏ぐは易く、重濁れるが凝り場るは難し。故、天先成りて、地後に定まる。然る後に神聖その中に生れ給ふ。

『国文六国史 日本書紀』上下 昭和七年十月 大岡山書店

古 天地いまだ割れず、陰と陽と分れざりし時、渾沌りたること鶏の子の如く、溟滓りて牙を含めりき。その清陽なるもの薄靡きて天となり、重濁れるもの淹滞りて地と為りき。精妙なるが合ひ搏ぐは易く、重濁れるが凝り場るは難ければ、天先成りて、地後に定りき。然ありし後に神聖その中に生れ給ひき。

『日本書紀』（日本古典全書） 昭和二十三年一月 朝日新聞社

古 天地のいまだ割れず、陰陽の分れざりし時、渾沌れたること鶏の子の如く、溟滓りて牙を含めりき。その清陽なるもの薄靡きて天と為り、重濁れるもの淹滞りて地と為るに及びて、精妙なるが合ひ搏ぐは易く、重濁れるが凝り場るは難ければ、天まづ成りて地後に定まる。然る後に神聖その中に生れましき。

岩波文庫『日本書紀』 昭和三年一月 岩波書店

古 天地未だ割れず、陰陽分れずあるとき、渾沌たること鶏子の如く、溟滓りて牙を含めり。其の清み陽なるものは、薄靡きて天となり、重く濁れるものは淹滞りて地となるに及びて、精しく妙なるが合へるは搏ぎ易く、重く濁れるが凝りたるは濁り難し。故れ天先づ成りて地後に定る。然して後、神聖其の中に生れます。

日本古典全集『日本書紀（訓読）』 昭和七年七月 日本古典全集刊行会

古、天地未だ割れず、陰陽分れず、渾沌たること鶏子の如く、溟滓りて牙を含めり。其の清み陽なるものは、薄靡きて天となり、重く濁れるものは淹滞りて地となるに及びて、精しく妙なるが合へるは搏ぎ易く、重く濁れるが凝りたるは濁り難し。故れ天先づ成りて地後に定まる。然して後、神聖其の中に生れます。

このように比較すると、細かな訓読の違いの他に、文末表現が大きく異なっていることがわかる。例えば、一文目を『岩波文庫』と『日本古典全集』は「牙を含めり。」と訓んでいるが、武田の『上代文学集』『国文六国史』『日本古典全書』は、いずれも「牙を含めりき。」と訓み、過去の助動詞「き」

を用いている。現行の注釈書や訓読文をながめても、武田と同様に過去の時制として訓読するものは見あたらない。これは、武田の訓読文の特徴といえる。この他にも、武田の『日本書紀』訓読文には、敬語を補読する箇所も多く見られる。武田独自ともいえる『日本書紀』訓読の態度は『日本古典全書』の解説にその理由がまとめられている。まず基本姿勢を次のように述べる。

日本書紀の本文は漢文体で書かれてゐる。これを如何やうに読むべきかといふに、数種の方法が考へられる。これに就いては、一、普通の漢文と同様に、達意を主眼として読むべきか、二、古伝本等に附せられてある訓に依つて読むべきか、三、本書成立当時の訓法を求め、これに依つて読むべきか等の方針の問題がある。このうち第二の、古伝本に付せられてある訓に依つて読むことは、実際に世上に行はれてゐる所であるが、それは要するに平安時代乃至鎌倉時代の語法及び語彙に依るものであつて、古風でも無ければ、達意でも無い中間的な訓であるから、採用了難い。古写本等に附せられてゐる訓は、参考としては貴重な資料であるが、これのみに頼つて読むことは無意義である。然らば、第一の達意に依るべきか、第三の古風に依るべきかといふに、これは両立するのであつて、読む時の目的に依つて、いづれでもよいのである。しかし達意を目的として読むにしても、字面や訓註の如き読み方に指定のあるものは、これに依る外は無いのであるから、その場合、木に竹を継いだやうな読み方の起ることも予想されるのはやむを得ない。

先に触れたように、『日本古典全書』の底本は『日本書紀』の古本系に属する北野神社本などを底本としているにもかかわらず、『日本古典全書』では、傍線部のように写本にある古訓を採用しない方針を採つてゐるのである。北野神社本には、訓が施されている箇所も多く、平安時代の訓を有してゐるとされ訓読資料としての価値も認められている。また北野神社本には特異な訓読も含まれており、それらの訓読の評価も高い。しかし、『日本古典全書』

の解説に記されている通り、北野神社本の訓と『日本古典全書』は特異な訓ほど採用されておらず、実際に見比べても訓読文には北野神社本との共通性は窺えない。つまり、武田の『日本書紀』本文は底本により、訓読文は武田によつて作られたといわざるを得ない。また、武田は文末の時制に関して次のように記している。

さてなるべく純粹な国語に読まうとするに當つて、文の基調を為す問題として、まづ考へねばならぬのは、時の表示如何である。日本書紀の大部分は、過去の事実を記述して居り、これに僅少の、今は何何といふ現在の事実が附記せられてゐる。その現在の事に就いて記してゐる部分は、現在形を以つて読むとして、過去の事に属する部分を如何に読むべきかといふに、過去の形を以つてする読み方と、現在の形を以つてする読み方とがある。過去の事実⁽¹⁾に就いても、その時に於いて語るといふ立場に在つては、現在の形で読むことも誤とは爲し難い。しかし伝誦に依る場合の如きは、多く過去の時を以つて読むべき徴証が存してゐる。

武田は、『日本書紀』の訓読を「なるべく純粹な国語」として読もうとしており、その点で「時の表示如何」を重視していたのである。武田は、時制に關して「多く過去の時を以つて読むべき徴証が存してゐる」として、『日本書紀』の訓注・「古事記」の表音文字・祝詞・宣命などの用例を挙げ、詳細に論じ解説している。例えば『日本書紀』の訓注には、「神祝祝之、此云⁽²⁾加武保佐积保佐积⁽³⁾」(神代紀)とあり、助動詞「き」を以て結んでゐるものと「爰倭迹迹姬命、仰見而悔之急居」(崇神紀)のように動詞の終止形の形で結んでゐるものがあることを示す。また『古事記』でも同様に「啼伊佐知伎也」や「神夜良比夜良比岐」(いずれも上卷)のように「き」を以て文を結ぶものと、そうでないものを示している。そして、過去の語法を用いてゐるものが多いことを示唆し、文末の時間表現の重要性について言及している。しかしながら、全部にわたつて一定の法則によることは困難であり、訓法の不統一が許容されねばならないとしており、やや消極的な見解とも受け取

れる。

五、宣長との関わり

今日でも、武田と同じように『日本書紀』を訓読するものは他にはみられない。近世期に目を移しても、「仮名日本紀」も過去の助動詞の補読は行っておらず、先行する近世から近代にかけての『日本書紀』の注釈書⁽¹⁹⁾をみても補読は行われていない。『日本書紀』本文に振り仮名を付したり、語句の意味を明らかにしたりはしているものの、時制に対する言及は見られず、文末表現の訓みまで明確にしているものが殆どである。しかし、『日本書紀』には武田と同じ訓読文はないが、『古事記』には、過去の助動詞「き」を用いている訓読文がある。それは、本居宣長の訓読である。

武田の過去の時制、特に過去の助動詞「き」を用いて訓読を行う姿勢や、他の古典籍を根拠とした訓読態度は本居宣長の態度を想起させる。宣長は、『古事記伝』の「訓法の事」という項目にて『古事記』の訓みについて、次のように論じている。⁽²⁰⁾

全古語を以て訓むとするに、それいとたやすからぬわざなり、其故は、古書はみな漢文もて書て、全く古語のまゝなるが無ければ、今何れにかよらむ、そのたづきなきに似たり、たゞ古記の中に、往往古語のまゝに記せる處々、さては続紀などの宣命の詞、また延喜式の八卷なる諸祝詞など、これらぞ連ぎさまも何も、大方此方の語のまゝなれば、まづこれらを熟く読習ひて、古語のふりをば知べきなり、

ここで宣長は、漢文で書かれた文献を訓読する立場を取りながらも、その難しさを語っている。また、訓の根拠としては『続日本紀』に収められる宣命や『延喜式』祝詞を重視している。この態度は、武田と同様である。宣命は、用言の活用部分や助動詞・助詞を仮名書きにする、いわゆる宣命体であるため、文体を知るための資料として適しており、上代に於ける祭祀の詞章が残

されたものとして考えると、『古事記』や『日本書紀』の訓読の根拠としてなりうるものである。宣命や祝詞は、現在に即して語られる文章であるが、その中には過去の事実を語る部分が多いことが指摘できる。

では、宣長が実際に『古事記伝』の中で行っている訓読を例にとり、宣長の訓読態度をみることにする。『古事記』上巻の冒頭は次のように始まる。⁽²¹⁾

天地初発之時、於高天原成神名、天之御中主神。調高下天云阿麻下効此次高御産巢日神。次神産巢日神。此三柱神者、並独神成坐而、隱身也。

この傍線部を付した箇所⁽²²⁾の訓読について比較検討したい。比較は流布本として寛永版本、度会延佳の『鼈頭古事記』、宣長の師である賀茂真淵の『假名書古事記』を対象として、宣長訓の独自性を確認したい。

隠^{カクシマス}身也。(寛永版本)

隱^{カクシマス}身也(鼈頭古事記)

ミかくりましぬ、(假名書古事記)

隱^{カクシマス}身也(古事記伝)

このように、宣長に先行するテキストは過去の時制としては扱われてはならず、また「き」の補読は、師真淵からの影響ではない。宣長より以前に、このような訓読はなく、時制を考えた訓読をするようになったのは宣長からといえる。この他にも、宣長は一貫して過去の助動詞「き」を用い、過去の事象として『古事記』を訓読している。今日の『古事記』のテキストも宣長の影響下にあり、殆どが宣長の訓読を踏襲している。宣長から新しい『古事記』の訓読が始まったと見ても良いであろう。

この「き」を用いる過去時制としての訓読態度は、武田にとっては『日本書紀』の訓読に反映されたと見ることができよう。武田にとって最初の『日本書紀』の訓読文である『上代文学集』には明確な訓読基準が記されていないが、時制を考えた訓読姿勢は早くから意識されており、宣長の『古事記』の訓読に通じるものである。また、『日本古典全書』の解説に明記されているように、過去時制の根拠として宣命体などを用いている点は、宣長と同じ

である。

漢意を排除した宣長は、漢字で書かれた『古事記』を「やまとことば」として扱った。それによって生まれた訓読が、『古事記伝』や『訂正古訓古事記』である。宣長が「やまとことば」とした態度は、『朝日古典全書』の中で武田が述べるところの、「なるべく純粹な国語」として読もうとした態度と共通するものと考えても差し支えなからう。

六、おわりに

本稿では、武田の著作に含まれるテキスト類から、その研究態度を見てきた。テキストの生成に当たっては、武田の『日本書紀』研究は、近代の『日本書紀』研究史上でも早期に位置付けられる。武田は『日本書紀』本文を整備するために、古写本を重んじる態度を取っていた。これは『万葉集』校訂作業の経験が生かされた結果といえる。しかし、訓読文に関しては、他の訓読とは異なった武田の姿勢が見られた。この姿勢は、漢文体で書かれた『日本書紀』を、国文学として捉え、純粹な国語として読み下そうと試みていたためである。『日本古典全書』の凡例にも、

日本書紀の本文は漢文で書かれてゐるので、これを漢字交り文に書き下すのは、一の翻訳である。漢文と国語とは、語法上相違するものがあり、また漢文は概して短い文章で出来てゐるが、国語は比較的長い文章を使用することが多い。今いはゆる漢文読みを避けて、なるべく純粹の国文に近いものとして、古い語法に則つて書き下し文を作つた。もとより努めて原文に即して読むこととしたが、いきほひ、意識にならざるを得ない場合も生じた。

とあり、『日本書紀』をいかに国文として捉えようとしたかが窺われる。

新出資料に含まれていた武田の講義メモには次のような一枚がある。⁽²³⁾

日本書紀 研究のあと 歴史的文

一、政治学方面 平安時代 平安↓鎌倉

二、思想方面 鎌倉室町

神代二巻を取扱ふ

三、歴史書方面 近世的多論

現代

そは本来の【面目】意義

副へて 国家論

文学

これは、『日本書紀』の研究を時代ごとにまとめたものと思われる。『日本書紀』は成立後、政治学方面、思想方面、歴史書方面から取り扱われてきた。

武田は、歴史書方面からの研究は本来の意義であるとするが、そこには国家論や文学の要素が添加されていると考えていたようである。武田が目指した訓読文は、歴史書としての『日本書紀』ではなく、『日本書紀』に顕れる思想的なもの、文学的なものより明らかにするためのものではなかったであろうか。この結果、本文と訓読文は、それぞれの視点から編纂されたと思われる。武田の訓読文に現れた時制を重んじる態度は、宣長の『古事記』の訓読に通じるものであり、武田は宣長の訓読方法を『日本書紀』に用いたともみることができるといえる。そのため武田が校訂をしたテキストには、他の『日本書紀』の訓読文とは異なった訓読文が成立したのである。したがって、武田の訓読文は決して独創的な訓読文ではなく、先学を踏まえた訓読文として見ることができよう。武田の『日本書紀』研究には宣長などの先行説の影響が見られ、言い換えるならば、武田の訓読文は国学者の訓読態度を受け継いだともいえるよう。

註

(1) 拙稿「三矢重松と武田祐吉」(『伝統文化リサーチセンター紀要』第一号 平成

二十一年三月)

- (2) 武田祐吉の略歴は、『國學院雜誌』第五十九卷十・十一月号(昭和三十三年十一月)掲載の武田祐吉博士年譜・著作目録に詳しい。
- (3) 『國學院雜誌』第三十七卷二号 彙報(昭和六年二月)「院友武田教授の学位受領」引用に際しては、漢字は常用漢字に改めた。
- (4) 『國學院雜誌』第十五卷七号(明治四十二年七月)・第十六卷七号(明治四十三年七月)・第十八卷七号(大正元年七月) 彙報。
- (5) 『國學院雜誌』第十九卷七号(大正二年七月) 彙報「本大學記念式及卒業式」。
- (6) 竹田宮恒久王 明治十五年(一八八二)―大正八年(一九一九)。北白川宮能久親王第一王子。妃は明治天皇の皇女昌子内親王。皇典講究所第二代総裁。
- (7) 武田の就職活動については、註①にて論じた。
- (8) 書簡の翻刻に際しては、適宜読点・改行を施した。この書簡は、拙稿①に於いて翻刻掲載したが、一部誤りを修正した。書簡の内容については拙稿を参照されたい。
- (9) 八代国治 明治六年(一八七三)―大正十三年(一九二四)。歴史学者。東京帝国大学文科大学史料編纂掛であり、後に國學院大學教授を兼務。長慶天皇の即位問題を考証したことで知られる。武田も長慶天皇御在位に関して有力な史料を発見した功勞により、御紋章附銀盃を下賜されている。この書簡当時、八代は東京大学史料編纂所におり、この書簡の五つ目の質問などは八代との関わりを想起させる。
- (10) 武田祐吉・今泉忠義編『国文六国史』(昭和七年 大岡山書店)
- (11) 中村啓信編『日本書紀総索引』(昭和三十九年 角川書店)
- (12) 國學院大學日本文化研究所編『校本日本書紀』(昭和四十八年 角川書店)
- (13) 佐伯有義 慶応三年(一八六七)―昭和二十年(一九四五)。神職、神道学者。國學院大學教授。『古事類苑』の編纂等にも携わった。
- (14) 彰考館本複製は昭和十九年に日本文献学会から、前田家本複製は昭和元年に大阪毎日新聞社から、北野神社本複製は昭和十六年に貴重図書複製会から出版されている。
- (15) 新出資料のうち『日本古典全書』に関連するものでは、原稿用紙に書かれた原稿や校正原稿などもある。
- (16) 黒板勝美編『日本書紀』(昭和三年 岩波書店)
- (17) 正宗白鳥編『日本古典全書』(昭和七年 日本古典全集刊行会)
- (18) 武田祐吉『日本古典全書』(昭和二十三年 朝日新聞社)解説。
- (19) 考察の対象としたものは、部分的であっても訓を付している注釈書とした。谷川士清の『日本書紀通証』、河村秀根・益根父子の『書紀集解』、栗田土満『神代卷葦牙』、鈴木重胤『日本書紀傳』、敷田年治『日本紀標註』、飯田武郷『日本書紀通釈』などである。
- (20) 引用は『本居宣長全集』第九卷(昭和四十三年 筑摩書房)に拠る。
- (21) 『古事記』本文の引用は『日本古典文学大系』に拠るが、旧漢字は常用漢字に改めた。
- (22) 比較対象とした寛永版本と『鼈頭古事記』は架蔵本に拠り、『假名書古事記』は『賀茂真淵全集』第十七卷(昭和五十七年 続群書類従完成会)に拠る。
- (23) 旧漢字は常用漢字に改め、翻刻した。また翻刻の「一」は訂正を意味する。